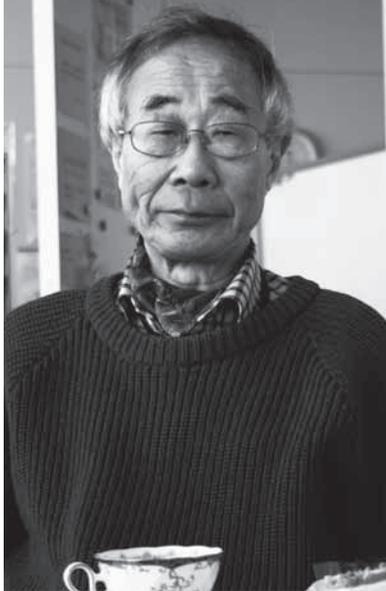


## 人と人がつながる国際交流を

協会設立から今日まで、ボランティアとして協会を支えてくださる千葉喜秋さん。国際交流は民間の力で進めることが大切だといいます。



千葉喜秋さん

元岩手日報 編集委員室長。(財)岩手県国際交流協会の設立準備委員～企画委員として活躍いただきました。また協会設立以来、機関誌の校正を担当いただいています。

国の音楽集団の「サムルノリ」※の公演を企画しました。初めてその演奏を聴いたときは、震えるほどの衝撃を受け、いつか必ず招いてほしいと思っただけで、企画委員会を中心となってボ

協会設立の1年ほど前に、民間企業の人50人ほどで設立準備委員会がスタートし、1年がかりでどのような組織にするか話し合いました。その準備委員会が協会設立とともにそのまま企画委員会となりまし。他県の国際交流協会は行政主導で設立された団体がほとんどです。しかし岩手県国際交流協会は、民間主導であるこの企画委員会を中心となつて設立されました。

主管の県総務部の責任者だった高橋洋介さん(後の副知事に「金は出して口は出さないでほしい」と言ったところ「はい」という返事でした。行政は金を出したら口も出すのがセツトだと思っていたので、このやりとりは印象深く残っています。その通り彼からは注文もなく企画委員会主導型でどんどん運んでいったという印象です。

私も資金集めに報道機関各社を回つて歩きました。まずは当時自分

の勤めていた岩手日報社に資金を出してもらうことにしました。その足でIBC岩手放送に行ったところ、「岩手日報さんが出すなら出しませう」と。続いてテレビ岩手に行ったところ「IBCさんも出すんですか。それじゃあ私たちも」と右ならえでこぞに出してくれました。こまめで民間人がかかわつて設立された都道府県の協会はないと思います。

国と国の国際交流はいかがわしい。何かがあるとぶつかりと関係が途絶えてしまいます。一方、個と個の結びつきは強力です。国籍が違っていてもたんお互い大切な存在だと認識すると、めつたなことで崩れません。個々のつながりの輪が広がっていくと少しずつ関係が良くなっていくでしょう。国と国とは打算で結びつく傾向があるので脆い。個人的な結びつきは永続的です。だから、国際交流は民間主導で行うべきなのです。

スターや入場券を作り、何もかも準備万端整え公演1ヶ月前というときに、サムルノリのリーダーが日本に入国できなくなり、公演を中止せざるをえないという事態になりました。代わりに招いたのはソウル芸術大学の歌舞団でした。公演目前のキヤンセルに困り果てた私は、旧知のチヨンさん(全龍福氏、漆芸家、盛岡市在住)に助けを求めました。私の記憶に間違いがなければ、サムルノリの公演を交渉してくれたのはチヨンさんだったはず。チヨンさんもサムルノリのリーダーの金徳洙氏もソウル芸大で教えていたことがあったからです。突然のアクシデントに何とか対応できたのも民間中心の企画だったからでしょう。

機関誌は18年もの間ボランティア編集委員会が中心になって作ってきました。まったくの自主性でやっています。これは特筆すべきことです。編集委員会が作りたいたものと事務局が望むものとが常に一致するわけではありません。しかし、事務局は編集委員会の意向を尊重してくれました。これもまた、民間の企画委員会が主導してやってくれたことが反映されたのだと思います。機関誌がこういうやり方であつてほしいという状況が維持されてきたからこそボランティアとして続けてこられました。ボランティアをするのは国際交流に

対して一生懸命やりたいというのが

基本ですが、同じ志をもった人とのつながりの中でやっていくことは楽しい。この人とのつながりが原動力となっています。

機関誌づくりにおいて編集長の役割は重要です。書き手の自主性や個性を尊重しながらも、きちんと勘所を押さえて指示しなくてはなりません。作る上で「これは譲れない」というものが重要です。その譲れないものというのは機関誌のバックナンバーを仔細に見るとおのずとわかってきます。そしてそれが機関誌の文化となっていくのです。

協会のたくさんの方々の事業の中でも情報提供は重要です。そういう意味でも機関誌の持つ意味は大きい。個人的には、年に1回だけではなくもっと発行して、市町村協会や県民に向けて情報を届けてほしいと思います。協会設立20周年を迎えますが、初心に帰つて県民や市町村協会が県協会に何を求めているか、何らかの方法で確認する機会としてほしいと願います。県単位の協会だからこぞできることをぜひ追求していただきたいと思っています。

※サムルノリ  
韓国の伝統楽器奏者 金徳洙(キムドクス)を中心に結成された演奏グループ。農村地帯の伝統的な農楽をルーツとする、ケンガリ、鉦、チヤング・鼓という4つの楽器を用いた躍動感あふれる舞台音楽です。



# 2008ワン・ワールド・フェスタinいわて NORAライブ&トーク

時 ▶ 2008.11.16(日) 18:00開演  
 場所 ▶ アイーナ7F アイーナホール  
 インタビュー ▶ 大橋都希子さん(フリーアナウンサー)



## サルサで海外へ！

サルサバンドとの出会いは

20歳のときに母と観光で行ったニューヨークで、初めて本物のサルサに触れました。お客さんもみんな踊りが上手で凄くカッコいいんです。ちょうどそれまでやっていたバンドを解散して何をやるうかと思案していたところだったので、これはサルサをやるしかないと思いました。そこで、スペイン語をカタカナで聞き取ってコピーするところから始めました。オルケスタ・テ・ラ・ルスの活動初期には、バンドのメンバーよりお客さんの数が少ないこともありました。そのようなところから始めて、ライブの回数を重ねていきました。

そして、いきなり海外へ？

サルサは細かいことを気にせず前を向いてやっていこうと思える音楽だったんです。日本の音楽界ではサルサでデビューできるとは思わなかったけれど、何かのきっかけになればと思い、デモテープを持って、中南米とニューヨークに行きました。最初に行ったパナマでは、知り合いを通じてラジオ出演の機会をもらいました。

その出演をきっかけに、取り上げてもらえるようになり、パナマ国内の視聴率90割という生放送のテレビ番組に出演することになりました。テレビ局から出た途端、「うわ、今、歌ってた人だ」と急にみんなの注目を浴びました。さすが視聴率90割です(笑い)。そこで、CDデビューにつなげたい思いで、ニューヨークに行きました。

ニューヨークでは、ラテン音楽雑誌を見て、「日本から来てサルサを歌っている。デモテープを聴いてほしい」と、プロモーターたちに、片っ端から電話を掛けました。そこで、プロモーターの一人と運命の出会いがありました。最初に会ったときは「この声は君なのか?」と、なかなか信じてくれませんでした。歌い、覚えていたステップを踊ったところ、大喜び。「みんながニューヨークでライブをやるときにはブッキングしてあげる」との約束を取り付けました。日本に戻って、みんながニューヨーク行きのためにお金をためることにしました。結局、ニューヨークに行けたのはその2年後です。

約束のライブが実現した

最初のライブでは、お客さんも30人程でした。演奏が始まっても、誰も動かずにじっと見ているんです。4曲目になって、二組のカップルがすーっとフロアに出て踊り出したんです。すると、みんなが立ち上がって踊りだし、最後には狂喜乱舞。「ニューヨークで感動してもらえ

た」とメンバーみんなで感激しました。そのときのライブが評判になり、ニューヨーク最後となる6回目のライブのときは4000人ぐらい集まりました。

アメリカ全土、カリブ海の島々、ベネズエラなど、いろいろなところに行きましたが、苦勞の連続でした。ベネズエラでは、チケットを買っていない人がスタジアム脇の隙間からどんどん入ってくるのを、銃で威嚇射撃するんです。ほんとにびつくりして、車の中でひれ伏しました。カリブのある島では、ライブ中に目がチカチカしてくしゃみが出てくる。なんだろうと思っていると、蜘蛛の子を散らすように人がいなくなるんです。プロモーター同士が喧嘩して、その報復のために会場に催涙ガスをまき散らしたんです。そんな中でも、メンバーはくしゃみをしながら演奏をしていました(笑い)。お客さんの間でも喧嘩していたり、殴られて血を流した人がいたり、いろんなことがあります。ラテンの人たちは盛り上がる熱くなつちゃうんです。

日本人ですから海外に行くほど、逆に日本人であることを意識します。たとえば日本では口約束が通るといふ信頼感があります。でも海外では口約束はほとんど守られません。会場に行つて急にライブがなくなることよくあります。いつまで待っても迎えが来ない、取材でラジオ局にいったら誰もいない、ということもあります。日本は安全ですし、信頼できます。海外に行くと、良さがわかります。

その後、国内外で様々な賞を受賞、日本の民間人で始めての国連平和賞も受賞しました

特に何もした覚えがなくて、好きな音楽を一生懸命やっていたら、この賞が降りてきたという感じです。後で聞いたところでは、その国の制度でライブのうち何回かに1回がチャリティーライブになっていたことなどがあつたようです。この国連平和賞をいただいて、逆に、何か活かさなくてはいけないと感じました。

#### 96年に解散、ソロ活動に入った

バンドを結成してから本当に忙しかったので、それぞれがソロ活動をしたいと考えるようになり、区切りをつけて解散するに至りました。私自身もキューバやニューヨークのミュージシャンとレコーディングをしたりと活動の幅を広げ、3枚のアルバムをリリースしました。

オルケスタ・デ・ラ・ルス復活のきっかけとなつたのは、ニューヨークの9・11同時多発テロ事件とか

この事件が起きたときは、ちょうど子どもを出産した後で、授乳をしながらテレビを見ていました。この世の中はどうなつてしまふんだらうと思いましたが、この1、2年前に、テロの標的となつたワールドトレードセンター内のクラブ

に出演したことがありましたし、いつもニューヨークからライブツアーにでていたので、他人事ではありませんでした。国境を越えて大事なことを教えてくれた人たちに、恩返ししなくてはと思つたのです。どうせやるなら、国連平和賞をもらったオルケスタ・デ・ラ・ルスのほうが意味が高いと思い、メンバーに声を掛けて、チャリティーコンサートをやることになりました。最初は一夜限りの予定でしたが、結局それが楽しくて、その後、再活動を始めるきっかけになりました。

## 自分の扉

—NORAさんから皆さんへのメッセージ—

いろんなことの中で、それぞれに「自分の扉」があり、その扉を開けると目の前に道ができていくのだと感じます。その中で紆余曲折うよよくせつがありながらも、いろんな人との出会いで進んでいくのです。ぜひ勇気を持って自分の扉を開けてほしいと思います。もともと地球上に国境という線はありません。人間がつくつた宗教や文化の違いを、音楽は瞬間にして飛び越えます。ラテンは自由でハッピーな音楽なので、ぜひ明日への活力にしたいだきたいと思えます。ムチシマス・グラフィアス！今日は本当にありがとうございました。



## NORA(ノラ)

### [プロフィール]

サルサバンド、「オルケスタ・デ・ラ・ルス」のボーカルとして90年世界デビュー。米国ビルボード誌ラテンチャートで11週連続1位を記録し、国連平和賞、文化庁芸術選奨文部大臣新人賞、ニューヨーク批評家協会賞、第35回日本レコード大賞特別賞(2回)など、目まぐるしい活動を続ける。96年からソロとしての活動を開始し、現在はデラルスの活動の他、自己のバンドを率いての活動や、ジャンルを越えて様々な優れたアーティストとの共演、また音楽を通しての国際交流を推進するため、国内・外を問わず活動を積極的に行っている。お母さまの出身地、二戸市には今でも年に数回里帰りして、大自然やおいしい食べ物などを堪能している。

# お知らせ



国際協力・多文化共生社会形成の推進に向けて、次の事業を行います。

## 国際交流(理解)・協力

○国際理解講演会の開催

○国際理解セミナーの開催

「フェアトレード・コミュニティいわて」プロジェクトで、「世界フェアトレードデイいわて」の開催のほか、年間を通じてフェアトレードに関するセミナーの開催やネパールとの交流を実施。

○国際理解ワークショップの開催

○いわて国際化人材活用ネットワーク

外国人や留学経験のある方などを登録し、各種講座の講師、翻訳、通訳として紹介

○外国文化紹介講師派遣

○中国語・韓国語講座の開設

岩手県中国人会などと協働で開催

○外国人との交流会「ちゃっとランド」の開催

外国人との気軽な交流会

○2009ワン・ワールド・フェスタいわての開催

国際交流団体や外国人と協働で、国際交流センターと県内3地域で開催

○ホストファミリーの登録と活用

○協会事業協力サポーターの登録・育成と活用

国際交流センターでの窓口対応のほか、当協会と協働でイベントを企画

○海外研修員等の受入

○草の根国際協力サポート

賛助会員会費の10%を県内の国際協力活動団体に助成

## 調査研究

○年報の作成

○事業評価の実施

○他県などの事業調査

## 国際交流センターの管理運営

○本県国際交流・協力・多文化共生活動の拠点施設である国際交流センターの管理運営

## 協会設立20周年記念事業の開催

○設立20周年の記念事業の実施

## 外国人児童・生徒のための就学支援ハンドブック

在住外国人の増加とともに、外国人児童数も増加していることから、外国人児童の保護者に日本の教育について、また受入側の学校にも外国人児童の母国(中国、フィリピン、ブラジル、韓国)の教育体制や文化について知識や理解を深めていただくために上記ハンドブックを作成しました。ぜひ外国人児童・生徒の受入にご活用ください。

(このハンドブックをご希望の方は当協会までお問い合わせください。)



# 協会からの

平成21年度、当協会は設立20周年を迎えます。今後より一層、県内の国際交流・

## 情報等の収集・提供

- 国際交流や協力などに関する図書などの情報の収集と提供
- 情報紙「jien go」の発行  
日本語・英語・中国語版は隔月発行、ポルトガル語・韓国語・フィリピン語版は年2回発行
- 機関誌「いわて国際交流」の発行(年1回)  
英語・中国語・ポルトガル語・韓国語・フィリピン語版は別冊で発行
- 多言語のホームページ、携帯電話ホームページ、メールリスト「いわてプラネット」による情報発信
- 国別、地域別の情報や資料の収集・提供

## 団体等との連携・支援

- 国際交流関係団体連絡会議の開催  
団体間のネットワーク形成、研修など
- 3県協会連携多文化共生社会セミナーの開催  
福島、宮城各県協会と連携し、市町村協会職員などを対象としたセミナーを宮城県で開催
- 国際交流関係団体への助成  
県内各団体の活動経費の一部を助成



## 在住外国人の自立支援・共生

- 外国人相談の実施  
国際交流センターでの外国人相談のほか、県内各地域で移動外国人相談
- 在住外国人ネットワーク形成  
各地域での外国人との共生に向けた企画事業に助成
- 多文化共生アクション・プロジェクト  
関係機関・団体、外国人、県民の方々と多文化共生についてのワークショップを開催し、アクションプランを作成。在住外国人に対する多言語による効果的な情報提供方法について検討
- 日本語サポーターの登録・育成と活用  
日本語を学びたい外国人への日本語サポーターの紹介、日本語サポーターの実践者研修会、地域の日本語教室開設のための研修会を開催
- 多言語サポーターの登録・育成と活用  
在住外国人の生活支援に必要な知識の習得のための研修会の開催など
- 在住外国人向け支援インフォメーションガイドの作成
- 私費外国人留学生支援
- 災害時等における外国人対応の市町村連携  
災害時の通訳派遣などの外国人支援に係る関係団体や市町村との連携について検討
- 在住外国人の子育てに関する支援・情報提供



楽しく身につけなくちゃ。はじめての英語。  
英語・英会話コース **幼 児** **小学生** **中学生**

**無料体験レッスン受付中!!**

資料請求・無料体験  
レッスンのお申し込みは  
右記まで。

ECC ジュニア  
盛岡センター  
受付/平日10:00~18:00

携帯電話OK! 「いわて国際交流を見た」とお電話ください。

0120-415-144

ホームティーチャー同時募集中

www.eccjr.co.jp

# あなたも賛助会員になりませんか

皆様からの会費の10%は国際協力に役立てられます。

## 会員の特典

- ① 協会の発行物をお届けします。  
情報紙「国際交流情報紙 jien go」(隔月)、機関誌「いわて国際交流」(年1回)  
\*学生会員の方は、情報紙に替えてメールマガジンでの情報発信となります。
- ② 協会の催しなどの案内をいち早くお届けします。イベント、セミナー、講座等の参加費が割引になります。
- ③ 賛助会員限定のイベントを開催いたします。
- ④ 旅行会社の国内外の企画商品が割引価格になります。詳しくは、提携旅行会社のガイド「旅行優待マップ」をご覧ください。
- ⑤ エスニックレストランで各種サービスが受けられます。詳しくは、提携レストランのガイド「エスニックレストランマップ」をご覧ください。

## 年会費

- ① 個人会員…1口 3,000円
- ② 団体会員…1口 10,000円
- ③ 学生会員…1口 1,000円

協会所定の振込用紙で、指定の銀行よりお振込みいただく  
と手数料はかかりません。協会窓口でも受け付けいたします。



平成21年3月に行われた賛助会員限定イベント  
「賛助会員サロン—中国の食文化「菜譜」」  
講師はマリアージュ総料理長 千葉 俊博さん(一関市千厩町)

## 寄付のお願い

協会は、民間の立場から国際交流・協力・多文化共生を通して地域の発展や活性化に寄与して参ります。協会の活動を継続的に発展させていくためには、協会の財政基盤の充実を図ることが必要であり、趣旨をご理解いただき、ご協賛をよろしくお願い申し上げます。

※協会は、「特定公益増進法人」の認定を受けており、寄付をされた方は税法上の損金算入や寄付金控除が認められます。

## 編集後記

▶「我々のやっていることは、食べ物を通じてそこで生きている人の悩みや喜びに思いを巡らすことです」と大地を守る会の藤田会長の言葉です。食を通じて、ここまで踏み込んで交流すれば、安心・安全なのはもちろん、心まで豊かになれると思いました。(林 裕)

▶国際交流を地道に続けてきた人に会うと、自然体でコミュニケーションをしてきたことを痛感させられます。岩手と地球の未来についても、足元から考え、何かアクションしていることも。今回、そんなことを感じました。(大森)

▶伝統を背負い、ものづくりを進化させ、経営を前進する。インタビューで印象的だったのは、トップ自らが顧客と対面して話す姿勢を語っていたこと。地道なマーケティングが伝統を支え、世界に羽ばたく原動力だったのですね。(黒田)

▶南部鉄器取材は亡き父へのオマージュとなりました。県工業試験場(現工業技術センター)で鉄器関係に携わっていたので…。あの頃と比べ、鉄器は時代に即した姿に変わっていました。私たち南部人はどうですか?(鷹)

▶岩手の人間として、郷土の良い物が海外で評価されるのは嬉しいことです。日本人の細やかさと手先の器用さ、そして何より真面目に取り組む姿勢をアピールして、日本食材、わけても岩手ブランドが世界に認知される日が来ますように。(M)



イラスト/松村亜耶

## 国際交流センター (アイーナいわて県民情報交流センター5F)

■開館日/毎日 ■開館時間/9:00~21:30 ■休館日/年末年始

## アクセスマップ

- 交通のごあんない
- ・JR盛岡駅から徒歩4分  
(東西自由通路経由)
- ・東北自動車道盛岡ICから車で8分



[編集]いわて国際交流編集委員会

[編集長]林 裕

[編集委員]大森不二夫/黒田農/鷹野洋子/長岡美和子

[発行]財団法人 岩手県国際交流協会

〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通一丁目7番1号

TEL.019-654-8900 FAX.019-654-8922

[印刷]山口北州印刷株式会社

〒020-0184 盛岡市青山4丁目10-5

TEL.019-641-0585 FAX.019-648-1026

※本誌掲載の記事、イラスト・写真の無断転載、複写を禁じます。